

「色川文書」所収の 忠義王文書に関する一考察 ——受容過程を中心に——

呉座勇一

GOZA Yuichi

【要旨】

色川文書は、那智山西方の山間部の色川郷（現在の和歌山県那智勝浦町色川地区）を拠点とした熊野水軍色川氏に関わる計八通の文書群である。近代から現代にかけて、色川文書の中で最も注目されてきたのは、忠義王発給文書である。忠義王は長祿の変によって吉野で命を落とした南朝の末裔とみなされ、彼の発給文書は貴重・稀少な後南朝文書として関心を集めてきた。一方で同文書は、様式の不自然さから、後世の偽作ではないかと疑われてもきた。本稿では、真偽に関する議論には深入りせず、同文書が近世の地域社会においてどのように受容されたか、また近世の後南朝史研究でいかに扱われたかを解明した。

同文書を後世の偽作と仮定すると、その作成者は忠義王を長祿の変の被害者と認識していなかったと考えられる。後南朝の嫡流とされる自天王の文書ではなく、彼の弟とされる忠義王の文書が作られた不自然さは、文書作成時には忠義王が弟宮と位置づけられていなかったと想定することで解消される。

また奥吉野には南朝関連史跡は存在したが、江戸前期には後南朝関連史跡は未成立で、忠義王の名を知る人もいなかった。吉野に忠義王文書が残っていないのは、このためである。

ところが『大日本史』編纂のための水戸藩の史料採訪が、熊野に残る忠義王文書と、かつて吉野で起こった長祿の変を結びつけた。吉野郡川上郷では自天王・忠義王の位牌が作られ、長祿の変で命を落とした二皇子として両人の名前が川上郷で浸透していく。南朝関連史跡は後南朝関連史跡へと改変された。川上郷が両人に関わる由緒書や旧記を多数作成して先祖の後南朝への忠節を喧伝した結果、後南朝伝説は外部に拡散されていった。これらの伝説は国学者が編んだ後南朝史に採り入れられることで信頼性と権威を獲得し、近代以降の後南朝研究の前提となった。

キーワード

後南朝 古文書 由緒書

はじめに

色川文書は、那智山西方の山間部の色川郷（現在の和歌山県那智勝浦町色川地区）を拠点とした熊野水軍色川氏に関わる計八通の文書群である。江戸時代には、色川氏を祖と主張する色川組大庄屋の清水家に伝来した。近代に清水家が断絶した後は色川郷の共有文書となり、現在は大野保郷会が所蔵している。

本報告書所収の総論に記されているように、色川文書からは、南北朝内乱において色川氏が南朝方として活躍したことが判明する。だが近代から現代にかけて、色川文書の中で最も注目されてきたのは、忠義王発給文書である。忠義王は南朝の末裔とみなされ、忠義王発給文書は貴重・稀少な後南朝文書として関心を集めてきた。一方で忠義王文書は、様式の不自然さから、後世の偽作ではないかと疑われてもきた。

本稿では、忠義王文書の真偽に関する議論には深入りせず、忠義王文書が近世の地域社会においてどのように受容されたか、また近世の後南朝史研究でどのように扱われたかについて明らかにしたい。

一 忠義王文書と後南朝

1 忠義王文書の概要

まず忠義王文書を左に掲出する。

■史料1 忠義王令旨

忠義（花押）

色河郷、即

先皇由緒之地也、其

龍孫鳳輦已幸大河内之行宮也、早参錦幡下、可致

軍功、然者可有恩賞者也、

天氣之趣如此矣、

乙亥八月六日

色河郷惣中^①

右の文書は、長祿の変と関連づけて理解されてきた。次節で詳述するが、長祿の変とは、長祿元年（一四五七）に赤松氏の遺臣が奥吉野にいた南朝末裔の二皇子を殺害した事件である。同事件と関連づけられたのは、この時に殺害された皇子を忠義王とする近世史料がいくつか存在するからである。康正元年（享徳四年、一四五五）が乙亥にあたるため、既に江戸時代に【史料1】は康正元年に年次比定されている。

この理解に従えば、「先皇」は南朝の天皇を指すことになる。右文書は、色川郷は南朝ゆかりの地であり、南朝の後裔が大河内の行宮（現在の三重県熊野市紀和町大河内と考えられている）に移られた以上、色川郷の者たちは馳せ参じて軍功を挙げよ、と命じている。要は軍勢催促状である。

これまた後述するが、各種近世史料によれば、忠義王は「二宮」であり、「一宮」は高秀王（『南朝皇胤紹運録』・『南山巡狩録系図』など）、あるいは尊秀王（『南山小譜』・静嘉堂叢書『南朝系図』・『残桜記』など）、自天親王（『南朝編年紀略』・『南帝自天親王北山由来記』など）と呼ばれたという。このため江戸後期の国学者、伴信友は「尊義王（筆者注、尊秀王の誤り）の令を奉りたる趣にて、忠義王の下したまへる書なり」と解釈している。歴史学者の村田正志も「忠義王が、当時後南朝天皇の資格をもつ自天王の勅命を奉じて色川郷に宛て、武力蜂起のよび

かけをしたものと解するのであるが、どんなものであろうか^③と推測している。すなわち「龍孫」を自天王に比定したのだ。本報告書資料編に見られるように、忠義王が奉者であるという理解は今に引き継がれている。

2 忠義王文書の真偽

さて、【史料1】の忠義王文書は真正な文書か、それとも後世に偽作された文書か。同文書の法量は縦三一・五cm、横四四・六cmである^④。村田正志が述べるように、「当時一般に用いられたものとはほぼ同様の大きな白紙^⑤」である。筆者は原本調査を行ったが、紙は楮紙と思われる。中世に使われた楮紙と似ているように見えた。筆跡はやや微妙だが、中世文書に見えなくもない。

問題は文言、様式である。「錦旗」という言葉を「錦の御旗」という意味で用いる例は中世文書ではほとんど見られない^⑥。「天皇の子孫」という意味で「龍孫」という言葉が使われている中世文書も思い当たらない。また「依天氣執達如件」「天氣如此」「天氣候也」「天氣所候也」といった文言はしばしば目にするが、「天氣之趣如此矣」という文言には違和感がある。

様式も不自然である。「色河郷、即先皇由緒之地也」という書き出しは唐突である。また村田は、【史料1】を忠義王が奉じた自天王の綸旨と捉えた。しかし綸旨の奉者は日下に署名するのが一般的である。忠義王が尊貴な身分であるから日下署判ではなく袖署判にしたと考えられなくもないが、尊大さを表現するのなら袖判のみにすべきで、「忠義」の署名は不要であろう。そもそも天皇の弟が令旨の奉者になるなど、他に例を見ない。なお「乙亥」と干支が記されている点も不審であるが、伴信友は北朝年号の使用を嫌ったからと説明しており、村田もこの説に従っている^⑦。

村田は【史料1】を真正な文書と認めている。その大きな根拠は、熊野那智大社文書に同じく乙亥年の年紀が入った忠義王の願文があるという事実である。村田は、この願文と【史料1】の本文・花押はそれぞれ同筆であると指摘し、ゆえに偽文書ではないと説く。以下に願文を掲げる。

■史料2 忠義王願文

立願之事

一、御遷宮之事

一、御領寄進之事

一、毎年の御代管可有参詣之事

一、御劔

一、神馬

右、所願成就之時、可有其成敗者也、

乙亥七月十八日

忠義（花押）

熊野権現那智御寶殿前^⑧

筆者は【史料2】の原本調査も行ったが、確かに両者は同筆に見える。しかし、だからといって【史料1】が真正な文書とは限らない。両方を同一人物が偽作した、【史料2】の筆跡を模倣して【史料1】を偽作した、といった可能性が想定できるからである。

村田正志は「文書の様式や筆跡は、文書の判定に重要な基準拠りどころになることはあらためていうまでもなく、我々の常に重視する所である。しかしながら我々が取扱う対象の古文獻は、概ね国や地方の中心における権要の地位にある人々のものであり、文化水準の高いものが多い。そのようなものを見慣れた知識経験をもって、辺境における文化に浴することに恵まれぬ者の文書記録に示された書式書法を、みだりに律

すべきではない」と主張する。⁹ 村田の見解は分からぬではないが、いささか苦しい。森茂暁氏は、「現在の古文書学の水準からみて、これらの文書にはなお検討の余地があると思うので、これらが享徳四年時点での南朝皇胤の動向を直接的に示す史料とは考えない」と述べている。¹⁰

ただ、【史料1】の信憑性を論じる場合、古文書学的検討だけでなく、南朝皇胤が当時、熊野地域で活動していたかどうかを確認する必要がある。次節では、後南朝の動向を見てみよう。

3 禁闕の変・長祿の変と忠義王

嘉吉三年（一四四三）九月二十三日夜、悪党が内裏（土御門東洞院殿）に火をかけ、三種の神器を奪おうとした。後花園天皇は宝鏡と共に左大臣近衛房嗣邸に逃れ、宝剣は後に回収されたが、神璽は奪われてしまった。¹¹ 彼らは比叡山に逃れたが、延暦寺は彼らに与同せず、幕府軍と共に乱を鎮圧した。この事件を一般に「禁闕の変」という。

禁闕の変の首謀者は『看聞日記』『康富記』によれば尊秀、『東寺執行日記』によれば高秀である。前述のように、近世の諸書は彼を忠義王の兄としている。近世に作成された系図類では、後亀山院―小倉宮―尊義王（空因）―尊秀王（自天王）と記すものが散見されるが、『康富記』は尊秀を「後鳥羽院後胤云々」と記しており、尊秀の系譜は定かではない。¹²

禁闕の変には金蔵主・通蔵主の兄弟も参加していた。『康富記』によれば二人は南朝最後の天皇である後亀山天皇の子で、金蔵主は万寿寺の僧侶、通蔵主は相国寺常徳院の僧だといふ。¹³ 近世の系図類には、この金蔵主を尊義王（空因）に当てるものもあるが、『師郷記』は南朝の護聖院宮の子としており、これまた判然としない。

文安元年（一四四四）八月には後南朝勢力が吉野の奥で蜂起した。『康富記』によると、吉野の奥と言っても、大和国ではなく紀伊国の北

山だといふ。¹⁴ 紀伊国の北山だとすると、現在の和歌山県東牟婁郡北山村および奈良県吉野郡下北山村ということになる。この時に蜂起した勢力が、禁闕の変の残党かどうかは不明である。

文安四年十二月、「南方宮」と称して「熊野の奥」に両三年潜伏していた者が紀伊守護畠山持国によって討たれている。¹⁵ この「南方宮」は文安元年に紀伊国の北山で蜂起した人物であろう。したがって、禁闕の変との関わりは明らかでない。【史料1】が偽文書だとすると、文安年間に熊野で南朝皇胤が活動していたという事実を参考に偽作したのかもしれない。

長祿元年（一四五七）十二月二日、嘉吉の乱で滅んだ赤松氏の遺臣が大和武士の小川弘光・越智家栄の案内を得て、奥吉野にいる後南朝の一宮・二宮を討った。なお一宮は吉野奥の北山（現在の奈良県吉野郡上北山村）に、二宮は同河野郷（同郡川上村大字神之谷）に御所を構えていた。けれども、この時は神璽を発見できず、翌二年四月に再度搜索して神璽を奪回した。世にいう「長祿の変」である。この功績によって、赤松氏は再興を認められた。

前述の通り、近世の諸書は、この時殺害された二宮が忠義王であると語る。だが『大乘院寺社雑事記』は「南方之宮兄弟」、『経覚私要鈔』は「二宮・二宮」、文明十年（一四七八）八月の「南方御退治条々」も「南方一宮」「南方二宮」と記しており、¹⁶ 尊秀王（自天王）・忠義王の名は見えない。【史料1】の真偽以前に、忠義王の実在そのものが確定していないのである。

同時代史料に忠義王の名が見えない以上、後世に創作された人名の疑いが残る。むしろ京都周辺で知られていないだけで、地元では宮の名前が言い伝えられた可能性はある。けれども、【史料1】にしろ、【史料2】にしろ、熊野那智に伝来した文書である。他の忠義王文書として、原本が失われ『南狩遺文』に写が収録されているものがあるが、これも

牟婁郡三里郷三越村（現在の和歌山県田辺市本宮町三越^{みこし}）に伝来したものだ¹⁹という。熊野にのみ忠義王文書が残り、忠義王が本拠としたはずの吉野に文書が保存されていないのは、いささか不自然である。

二 忠義王文書の「発見」

1 軍記物に見える南朝皇胤

それでは、忠義王の名はいつ頃から見られるようになるのか。まず戦国期から江戸期にかけて成立した軍記類を確認しよう。

天正十六年（一五八八）の奥書を持つ軍記物『赤松記』には、「爰に南方と申て両宮御座候。これは太平記の比、位争の御門の御末也。何様天下を一度御望有て、御兄弟、吉野のおく北山と申所に、一の宮は御座候。二の宮はかはの、郷と申所に御座候」とある²⁰。これは、「南方御退治条々」の内容に沿った叙述である。しかし『赤松記』はあくまで赤松氏再興のきっかけとして長祿の変（吉野にいた南朝皇胤の殺害）に触れているので、文安年間に熊野で活動していた南朝皇胤には言及していない。

次に近世初期に成立したと言われている『桜雲記』²¹は、禁闕の変で擁立された南朝皇胤を後龜山皇子の「南朝ノ宮寛成親王」とする。この寛成親王は禁闕の変の際に比叡山で自害し、高福院という南朝皇胤が新たに擁立されたが、高福院も長祿の変で殺害され、神璽を奪われたという²²。また『嘉吉記』は「南帝」²³、『南方紀伝』は「南方新皇」「南皇」「高福院」と記す。尊秀王（自天王）の名は見えない。しかも『嘉吉記』には忠義王に該当する弟宮がそもそも登場しない。『南方紀伝』は「南方新皇」の弟宮が紀伊で活動していたと記すが、この人物は文安四年に討たれてしまっており、長祿の変と関連づけられていない。

もともと『桜雲記』には、文安年間に紀州で活動する南朝皇胤は円満院門主の「源勝法親王」だと記されている。ただし、寛成親王の弟宮という位置づけではない。

要するに、軍記類を見る限り、十五世紀中葉に南朝の末裔である兄弟の宮が熊野・吉野で活動したという認識は、江戸前期には普及していなかった。そうであるならば、『史料1』の解釈も変わってくるだろう。

村田正志が【史料1】を忠義王が奉じた綸旨と解釈した前提には、後南朝の天皇は尊秀王（自天王）であり、忠義王はその弟宮であるという理解がある。だが右に示したように、その理解は自明のものではない。

先入観を排して【史料1】を読めば、忠義王が綸旨を奉じているというより、忠義王が自らの意思で命令を出しているという理解できよう²⁴。【史料2】からも、忠義王の上位者の存在はうかがえない。

仮に【史料1】が後世に作成されたものだとすると、文書作成者は忠義王に熊野で活動していた南朝皇胤という属性のみを与えており、長祿の変で殺害された後南朝天皇の弟宮という設定を用意していなかったと考えられる。

2 地誌類・紀行文に見える南朝皇胤

では、地誌類・紀行文には忠義王は登場するのだろうか。延宝九年（二六八一）に大和郡山の林宗甫が著した地誌に、『和州旧跡幽考』がある。別名『大和名所記』といい、大和国の名所旧跡を考証し、各郡単位に網羅した最初の刊本である。

この『和州旧跡幽考』巻十一、吉野郡の巻に「南帝王社」という項目がある。『和州旧跡幽考』によると、南帝王社は川上の投地藏堂のほとりにあるという。川上の投地藏堂とは、現在の奈良県吉野郡川上村に所在する金剛寺のことである²⁵。なお『和州旧跡幽考』には「投地藏堂」の項目もあるが、そこに後南朝関係の記述は見られない。左に「南帝王

社」の項を引用する。

■史料3 和州旧跡幽考

南帝王社

當社は後醍醐天皇第七宮にぞおはします。芳野小瀬村といふなる所にて崩御なり給ふ。その瀧川寺に御位牌あり。白天王正聖佛とえりたり。崩御の時の御製とて此寺にいひつたへたり。のかれきて 身を奥山の 柴の戸に 月も心を あはせてそすむ⁽²⁷⁾

芳野小瀬村の瀧川寺とは、現在の奈良県吉野郡上北山村大字小椽⁽²⁸⁾(旧小瀬)に所在する瀧川寺のことである。ちなみに同寺には尊秀王(自天王)の墓がある。明治四十五年に宮内省告示によって北山宮(自天王)の陵墓と認められ、川上村の金剛寺にある尊秀王(自天王)の墓は河野宮(忠義王)の墓と改称させられた。川上村は激しく抗議したが、指定は覆らず、現在に至っている。

右の【史料3】で興味深いのは、延宝九年(一六八一)以前に「白天王(自天王の誤りか)」を祀る南帝王社が存在し、瀧川寺に自天王の位牌が安置されていたものの、自天王が後醍醐天皇皇子として把握されていたという事実である。すなわち、この時点では自天王は禁闕の変・長祿の変と結びつけられていないのだ。⁽²⁹⁾ 忠義王に至っては、影も形もない。

ところが時代が下ると、地誌類の記述内容が変化する。奈良奉行所の与力だった玉井定時が隠居後の元禄享保期に著した大和国の地誌『大和名勝志』は、「竜川寺」(瀧川寺)の項を立てている。それによれば、竜川寺の開基は「白天勝公正聖仏」、つまり自天王で、後醍醐第七皇子だという(なお一般には、後醍醐の第七皇子は後村上天皇とされる)。自天王は享徳年間頃に北山郷小瀬村に身を隠すが、露見してしまう。足利義満の執事である細川武蔵守(頼之)は自天王の御所を探索するが、

見つけれなかった。その後、赤松遺臣が赤松家再興のために自天王を殺して神璽を奪ったという⁽³⁰⁾。自天王と長祿の変を強引に結びつけているが、後醍醐天皇の第七皇子では長祿の変と時代が合わない。さらに言えば、長祿の変の時期の室町幕府將軍は八代將軍足利義政であり、三代將軍義満ではない。

伊藤仁斎門下の儒学者である並河誠所⁽³¹⁾は、関祖衡の遺志を継いで享保十四年(一七二九)に『日本輿地通志畿内部』の編纂を開始した。『五畿内志』と通称されるこの漢文体の地誌は、『河内志』・『摂津志』・『大和志』・『山城志』・『和泉志』の五編から成り、近世刊行の地誌の白眉とされる。享保二十一年に刊行された『大和志』は川上の金剛寺を立項している。それによれば、金剛寺には「南帝自天王陵及小祠、宝篋印塔一基」があり、宝篋印塔には「長祿元年十二月二日」と刻まれているという。⁽³²⁾ 忠義王は依然として出てこないものの、自天王が長祿の変で亡くなったという認識が定着してきたことがうかがわれる。

明和と天明年間頃に植村禹言⁽³³⁾が編纂した『広大和名勝志』の「金剛寺」の項は『大和志』の記述を引用し、自天王と長祿の変を関連づけている。また「南帝王社」の項では林羅山の『足利將軍家譜』を引用して長祿の変について説明している。⁽³⁴⁾ 『足利將軍家譜』は長祿の変を足利義政の時代の事件と記しているのだ。自天王が後醍醐皇子では時代が齟齬することを植村は認識していたと思われるが、「南帝王社」の項で『和州旧跡幽考』の記事も引用している。ともあれ、川上の金剛寺・南帝王社は長祿の変に関わる史跡とみなされるようになったのだ。

なお『吉野志』は「忠義親王の墓」を紹介し、初めて忠義王の名を載せるが、残念ながら著者・成立年は未詳である。⁽³⁵⁾ 幕末に天誅組に参加して捕らえられた伴林光平(伴信友の弟子)が獄中で書いた『南山踏雲録』にも忠義王は登場する。光平らが文久三年(一八六三)九月二十一日、川上郷武木村で昼食をとった際、村の故老から忠義王の話を開い

た。それによれば、村々で分けて保管している忠義王の具足を毎年二月五日に持ち寄り、朝拜式を行っているという³⁴⁾。朝拜式でまつられているのは自天王なので、自天王と忠義王を混同していると思われるが、忠義王の知名度が上昇していることは確かだろう。こうした記述の変遷は、次節以降で述べる『大日本史』編纂事業の影響によるものと考えられる。

3 佐々宗淳と忠義王文書

水戸藩の史館（彰考館）の編修として『大日本史』編纂事業に従事していた佐々宗淳は、延宝八年（一六八〇）六月に上洛し、七月から十二月頃まで、河内・奈良・高野山・熊野・吉野などを回って史料採訪を行っている。この熊野での史料蒐集の際（熊野那智大社の実方院での調査時）³⁵⁾、色川文書の存在を知り、調査を行っている。

佐々宗淳らの調査記録である『南行雑録』には色川文書が七点収録されている³⁶⁾。現存する色川文書は八点である。欠けているのは本報告書資料編「熊野水軍関係文書」所収の【色川四号】である。

延宝六年に清水角太夫（色川盛重）は京都の経師屋に「繪旨二通・消息六通」の補修・表装を依頼している³⁷⁾。よって、佐々宗淳は八通を閲覧したと考えられる。【色川四号】を『南行雑録』に収載しなかったのは、虫損などのために差出者不明で、同文書の意味をとることができなかったからだろう。

さて、この調査の経緯については、同年九月四日に佐々宗淳が江戸小石川にある水戸藩邸の史館に宛てた報告書に詳しい。

■史料4 紀州筋御用之覚書

紀州筋御用之覚書

（二つ書きを九つ略す）

一、那智今五里程畔ニ色川と申山村有之候、此處ニ平惟盛³⁸⁾之末葉居申、文書等所持申たる由承申候故、色川へ参可申と申候へハ、新宮之留守居衆被申候ハ、事之外險阻なる所ニ而中々下人共も迷惑可申候間、色川庄屋ニ右之文書持参仕、路次迄罷出申候様ニ可仕とて、則其辺江申付候処、色川庄屋文書携へ来り申候、其庄屋則色川殿ニ而惟盛之子孫之由ニ御座候、系図ハ紛失仕たる由ニ而無御座候、文書ハ慥なる物ニ而御座候、重代之旗も持参申候、赤地之絹ニ黒ニ而揚羽之蝶をえかき申たる旗ニ御座候、平家之旗と相見へ申候、南朝へ軍忠有之者と相見へ候而後醍醐・後村上両朝之繪旨有之候、後醍醐の時分之色川ハ色川左兵衛尉平盛氏と申たる者ニ御座候…（後略）³⁹⁾

右の【史料4】によると、那智から五里ほど山奥に色川という村があり、そこに平維盛（清盛の嫡孫、各地に生存伝説が残る）の子孫が住んでいて文書を所持していると聞いた佐々宗淳は、色川村に赴こうとした。しかし熊野新宮の留守居衆が、道が險阻だから行かない方がよい、色川庄屋（清水角太夫平盛重）に持ってこさせるから、と宗淳を止めた。平維盛の子孫である色川庄屋が持参した文書を調査したところ、真正なものだったという。

ここで注目したいのは、佐々宗淳は後醍醐天皇繪旨・後村上天皇繪旨には関心を示すものの（本報告書資料編「熊野水軍関係文書」色川一号・二号が示すように、実際にはいずれも後醍醐天皇繪旨）、【史料1】「忠義王令旨」には全く言及していない点である。『大日本史』は南朝正統説に立脚しているので、佐々宗淳ら水戸藩の史臣による史料採訪は主として南朝関係史料の蒐集にあつた³⁹⁾。だから宗淳は後醍醐天皇繪旨・後村上天皇繪旨の発見を報告しているのである。『南行雑録』には那智山実方院所蔵文書として【史料2】も収録されており、宗淳は忠義王願文

も閲覧したことが分かるが、にもかかわらず宗淳は忠義王に特段の興味を見せていない。

佐々宗淳には、吉野で起こった長祿の変と、熊野に残る忠義王文書を結びつける発想がなかったと考えられる。⁴⁰この時期には、忠義王は無名の存在だったのである。

三 忠義王伝説の形成と展開

1 『大日本史』編纂と後南朝伝説の形成

前章で指摘したように、『大日本史』編纂事業の一環として色川文書を調査した佐々宗淳は、忠義王文書に格段の関心を払わなかった。ところが、完成した『大日本史』には、長祿の変の犠牲者として忠義王の名を記している。『大日本史』本紀第七十一は長慶天皇と後龜山天皇の事績をまとめた巻だが、末尾に禁闕の変と長祿の変に関する説明を載せている。そして長祿の変の注記として「按二王子名諱昭穆、今無所考、吉野高峯山福源寺有一古牌、記曰、一宮自天親王、二宮忠義大禪定門」と書いて⁴¹いる。この吉野の福源寺は、高原村、現在の奈良県吉野郡川上村大字高原に所在する寺院である。『大日本史』は続けて【史料1】と【史料2】を引用し、長祿の変で殺害された二王子の名前が自天王と忠義王である可能性を指摘している。延宝八年八月の「色川文書」調査の後、彰考館は追加調査によって吉野郡川上郷の福源寺に自天王と忠義王の位牌があることを知ったのだらう。⁴²

それにしても、福源寺に自天王・忠義王の位牌があるという話が突然出てきたことには、違和感を持つ。地誌類に見えない情報だからである。そもそも高原村と自天王・忠義王の接点は乏しい。なるほど「南帝自天親王川上郷御宝物由来書写」には、長祿の変で自天王が北山で討た

れた際に、忠義王は高原村に逃れて、そこに隠れ住んだまま崩御し、位牌が福源寺に安置された、と記されている。⁴³しかし、この「南帝自天親王川上郷御宝物由来書写」は長祿二年（一四五八）に作成された体裁をとっているものの、現実には江戸時代の作成と考えられている。⁴⁴

加えて、確かに現在、高原村には南帝王の森という陵墓参考地があり、地元では忠義王の墓と言い伝えられている。傍らには自天親王神社がある。⁴⁵ところが『大和志』では南帝王の森は「川上西陵」と呼ばれており、新待賢門院（阿野廉子、後醍醐天皇の后）の陵墓として紹介されている。⁴⁶高原村には後南朝関連史跡は存在しなかったが、ある時期以降、新たに創造されたのである。

忠義王が実在の人物であるなら、吉野の川上郷に忠義王の位牌があり熊野那智に忠義王の文書があっても不思議ではない。だが仮に忠義王文書が後世に作成されたものだとしたら、吉野郡川上郷の福源寺に忠義王の位牌が存在するのは不審である。遠く離れた熊野那智と吉野北部で「忠義」の名が偶然に一致するはずがないので、福源寺の位牌は、忠義王文書の存在を知った者によって作られたことになるらう。

福源寺にある両宮の位牌を作った人は、無名であるはずの忠義王の名をどうやって知ったのか。以下はあくまで筆者の推測であるが、『大日本史』編纂が契機となったのではないだろうか。

長祿の変の舞台である吉野に関する調査を進める中で、佐々宗淳らは熊野の忠義王文書と長祿の変が関連する可能性に気づいたのではないか。すなわち、忠義王が長祿の変で命を落とした南朝皇胤である可能性に思い至った。この考えは、宗淳らの史料調査に協力した現地吉野の人たちにも共有されたと思われる。そして、彼らの願望に応える形で忠義王の位牌が誕生したのではないだろうか。

兄が自天王で弟が忠義王という、いささか不自然な名前の組み合わせも、右のように考えれば整合的に説明できる。もともと吉野では、自天

王は後醍醐天皇皇子の名前として認識されていた。この自天王を長祿の変の犠牲者に改変し、熊野から来た忠義王の名前と組み合わせた。自天王と忠義王の名前は別々の由来を持つので、兄弟にもかかわらず名前が似ていないのは当然なのだ。

このように考えた場合、問題となるのは、福源寺にある両宮の位牌の存在を彰考館が知った時期である。佐々宗淳が熊野で色川文書を閲覧した延宝八年（一六八〇）八月の時点では、彰考館は自天王・忠義王の位牌の存在を把握していない。そして『大日本史』本紀の完成以前に、位牌の情報をつかんでいる。

ここで『大日本史』完成までの経緯を確認しておこう。元禄十年（一六九七）十二月、神武天皇から後小松天皇までの天皇一〇〇代の本紀すなわち「百王本紀」が完成する。正徳五年（一七一五）四月、それまで「本朝史記」「倭史」などと呼ばれていた歴史書の書名が正式に『大日本史』と決まり、同年十二月六日の水戸光圀の忌日には、本紀七十三巻・列伝百七十巻、計二百四十三巻の清書本が光圀廟に供えられた（正徳本）。その後も本紀の改訂を続け、享保五年（一七二〇）十月に本紀・列伝ほか計二百五十巻が完成し、幕府に献上した（享保本）。なお本紀・列伝には安積澹泊が執筆した論贊が付された⁴⁷。

以上から、幅を最も広く取った場合、位牌の情報を彰考館が把握したのは、延宝八年（一六八〇）九月以降、享保五年（一七二〇）九月以前ということになる。いずれにせよ、並河誠所らが『大和志』を編纂していた時期には、自天王・忠義王が長祿の変で命を落としたという伝説は既に誕生、流布していた。自天王が長祿の変で亡くなったと『大和志』が記すのは自然である。『大和志』が忠義王に触れていないのは気になるが、先行地誌である『和州旧跡幽考』や『大和名勝志』が忠義王に言及していないので、これに倣ったのかもしれない。

吉野の後南朝伝説は高原村の福源寺から発祥したと考えられる。延宝

九年刊行の『和州旧跡幽考』に記されているように、南帝王社や瀧川寺は、もともとは後醍醐天皇皇子ゆかりの史跡であった。南朝関連史跡を後南朝関連史跡に衣替えるのは、たやすいことではない。そこで、南朝関係の由緒を何も持たない福源寺から、後南朝伝説の創造を始めたのではないだろうか。後南朝伝説の普及にともない、南帝王社や瀧川寺は長祿の変に関わる史跡へと変貌していく。

2 後南朝伝説の展開

水戸藩の『大日本史』編纂事業に刺激を受けて、川上郷では多数の由緒書・旧記が作成された。後南朝関係の由緒書で早期に成立したものとして、「南帝自天親王御陵川上金剛寺在之由来書写」がある。長禄元年（二四五七）に作成された由緒書を宝永四年（一七〇七）に書写した体裁をとるが、様式や言葉遣いを見る限り、実際には宝永四年に作成されたものと考えられる。この史料には、長祿の変で自天王が討たれたこと、川上郷民が刺客を追いかけて自天王の首や鎧・太刀などを取り戻したこと、「川上神野谷村金剛寺」で首を葬ったこと、以後は毎年二月五日（自天王の誕生日）に自天王の遺品である武具をご神体として崇める御朝拜式を行っていることなどを記している。忠義王は登場しない。なお今も金剛寺では毎年二月五日に御朝拜式が行われている。

既述の通り、川上郷で後南朝関係の伝承が語られるようになったのは、それほど昔のことではない。御朝拜式の創始も宝永四年から大きくは遡らないだろう。

川上村に現存する由緒書・旧記の多くは十九世紀になってから成立したと考えられている⁴⁸。『大和志』の刊行が影響したのかもしれない。文化八年（一八一二）に川上郷碓村の伊藤清内が追記している「吉野旧記」や江戸後期に作成されたと思われる「川上朝拜実記」によると、自天王は川上郷の三之公（川上村大字神之谷）に仮御所を営んでいたが、

康正元年に熊野那智に移動した。ところが裏切り者が出たため、北山郷の小瀬寺（瀧川寺か）に移ったという^{⑤⑥}。吉野から熊野那智に移動し、また吉野に戻るといふ、極めて不可解な動きである。これは、【史料1】や【史料2】との整合性を意識したためだろう。川上郷の人たちは忠義王文書を知った上で、それに合わせる形で後南朝伝説を作っていた。ただし、これらの後南朝関係の由緒書でも、後南朝の嫡流である自天王に関する記述が中心をなしており、忠義王への言及は少ない。

3 忠義王伝説の完成

後南朝伝説は地元吉野だけで語られたわけではない。『大日本史』刊行以降、長祿の変で殺害された南朝皇胤への学問的関心が高まってきた。大和国芝村藩に仕えた津久井尚重（竹口英齋）が天明五年（一七八五）に著した南朝編年史『南朝編年紀略』は、【史料1】などを引きつつ禁闕の変や長祿の変などについて叙述している。なお同書は忠義王が色川左兵衛尉に「令旨」を与えたと記している。また同書は「一宮自天親王」「二宮忠義王」と記している^{⑤⑦}。同じく尚重の著作である南朝系図『南朝皇胤紹運録』は、空因（尊義王）の子として、高秀王（自天親王）と忠義王を配している^{⑤⑧}。

興味深いのは、両宮の母は色川左兵衛尉盛定の娘であるという説を『南朝皇胤紹運録』が載せている点である。【史料1】や【史料2】の影響だろう。『南朝編年紀略』は、文安年間に紀伊で蜂起して討たれた南朝皇胤を、上野宮説成親王の子で、円満院円胤大僧正（還俗して義有と名乗る）であるとしており、自天王と忠義王は一貫して吉野にいたという理解をとっている。忠義王がずっと吉野の川上郷にいたのであれば、遠く離れた熊野那智の色川氏に軍勢催促状を出すのは、いささか不自然である。この不自然さを解消するために、色川氏を両宮の姻戚としたのであろう^{⑤⑨}。ただ、この設定を採用した場合、空因と色川氏娘との婚姻が

いつ、どこで、どのようにして結ばれたのか、合理的に説明するのが難しくなってしまうが。

文化六年（一八〇九）に国学者の大草公弼が編纂した南朝の歴史書『南山巡狩録』の「附録」は、長祿の変について叙述した後、次のような注記を載せる。

■史料5 南山巡狩録附録

吉野山の事をかきけるものに、今七保九ヶ村と申は東川村・西河村・大瀧村・寺尾村・入吉村^{（谷本）}・迫村・高原村・人知村・白屋村なり。此村々に守護する寶物あり。御兜、赤銅金の筋金、金の鍬形、金龍頭正平革の吹返し并に御位牌二ありて其銘に南朝一宮自天禪定法皇又南帝王二宮忠義禪定法皇とあり。長祿元年の舉に御首并に御具足をとり返しけるものゝ子孫を筋目の者といひ、毎年順番にて村々に於て祭禮なし行事をつとむ。祭の日ハ二月五日なり…（中略）…扱彼山中に此宮御自害の時の舊跡多く存せり。是を史傳に考ふるに、一宮・二宮及び尊雅王の事、其説紛々として更に決しかたし。姑く前文の如くこゝにしるせり^{⑤⑩}。

『南山巡狩録附録』が依拠した「吉野山の事をかきけるもの」がどの史料を指すのかは不明だが、紹介している位牌は、『大日本史』で紹介された福源寺の位牌と同一だろう。なお右に挙げられている村々は川上郷に属す。中略部分によると、川上郷の六保九ヶ村、四保五ヶ村でも七保と同様の祭礼を行っているという。江戸後期には御朝拜式が大々的に行われていたことが分かる。このことは『南帝自天親王北山由来記』など、川上村の由緒書からも裏付けられる。

吉野にある後南朝関係の史跡に対して、大草公弼は慎重な態度を示している。福源寺の位牌や【史料1】、【史料2】に対しても全幅の信頼を

置いていないのか、『南山巡狩録』の「附録」の本文では忠義王を「河野宮」と記している。ちなみに大草は【史料1】を「忠義王としるせし癸未の年の令旨」と紹介しており、年紀を誤っている。大草は「其文書の全文を見ざるにより、敢て決定なしがたく参考に備へるなり」と文書の真偽に関する結論を留保している。『大日本史』は【史料1】を紹介しているものの全文を引用しているわけではないので、全文を知るのはこの時点では難しかったのかもしれない。しかし大草は、『南山巡狩録』の「系図」では、空因の子として「高秀王」と「忠義王」を載せ、「母詳ならず。榮齋（筆者注、竹口英齋のこと）は色川左兵衛盛定が女と云」と注記している。⁵⁵⁾

現代にまで受け継がれている忠義王の伝説を完成させたのは、『残桜記』だろう。『残桜記』は国学者の伴信友が文政四年（一八二二）に著したもので、後南朝の歴史、特に禁闕の変・長祿の変を主眼として詳細に叙述したものである。執筆の動機としては、『南山巡狩録附録』などの後南朝史叙述の誤謬を訂正することが指摘されている。⁵⁶⁾

伴信友は自天王・忠義王について「南方宮方の者どもは、比叡山より大和国へ引退き、再吉野わたりの者どもと相謀りて、尊秀王に神璽を奉り、私に天子と称し、或は南方新皇、また自天大王など称し参らせて、吉野の山奥なる北山庄大河内と云ふ所に御在所を構へ、北山宮と称し、又北山殿とも南方一宮とも称して仕奉る、また尊義王の第二御子に、忠義王（尊秀王の御弟）とておはしましけるを、彼大河内の御在所より、山中八里ばかり隔りたる、河野谷と云ふ山中を（今神野谷村といへりとぞ）御在所として、河野宮と称し、又南方二宮とも申て守護しまゐらせけり」と詳細に紹介する。⁵⁷⁾ 信友は『残桜記』本文で「忠義王」と記しており、忠義王の実在性を確信している。

伴信友は『残桜記』で【史料1】・【史料2】を全文引用し、『大日本史』・『南山巡狩録附録』の位牌の記述も詳しく引用している。信友はこ

れらの資史料を信頼して、長祿の変で殺害された南朝皇胤の一人の本名は忠義だと考えたのだろう。

禁闕の変で尊義王が討たれた後、尊秀王（自天王）・忠義王は吉野に逃れ、以後は長祿の変まで吉野を動かなかったというのが伴信友の理解である。『南朝編年紀略』の理解を踏襲したものと見える。この場合、吉野に忠義王発給文書が残らず、熊野にのみ忠義王文書が見られるのはなぜか、という疑問が生じるが、信友は明確な解答を用意していない。色川文書の他の文書を掲げて色川氏が早くから南朝方であったことを指摘し、「御合体の後も、なほその宮方に心よせ奉りたりとぞきこえたる」と記すのみである。⁵⁸⁾

前述のように、『南朝編年紀略』も『南山巡狩録附録』も【史料1】を忠義王の令旨とみなしている。けれども『残桜記』は「尊秀王令書」と呼び、忠義王は奉者であるという理解を示している。この解釈を村田正志が踏襲し、現在に至ることは、第一章で論じたとおりである。

さて、忠義王文書が残された紀伊国では、忠義王はどのように認識されたのだろうか。江戸幕府の命を受けて紀州藩が編纂し、天保十年（一八三九）に完成させた紀伊の地誌『紀伊続風土記』は、現在知られている忠義王文書を全て網羅している。同書は【史料1】を色川文書の中で後醍醐天皇綸旨二通に続く三番目に掲げており、綸旨に準ずる重要文書とみなしている。⁵⁹⁾

加えて『紀伊続風土記』は、牟婁郡色川郷口色川村の項で、色川氏が「康正元乙亥年忠義王（後亀山院第二皇子の曾孫尊秀王の弟なり）北山郷に坐しける時御書を給ふ」と記す。⁶⁰⁾ この北山郷は、紀伊国牟婁郡北山郷（現在の和歌山県東牟婁郡北山村・奈良県吉野郡下北山村）を指すと考えられる。つまり同書は、忠義王が熊野に滞在していたと理解している。既述の通り、実際には、長祿の変で殺害された二宮は吉野郡川上郷に居を構えていた。

第一章で論じたように、文安元年（一四四四）に後南朝勢力が紀伊の北山、すなわち紀伊国牟婁郡北山郷で蜂起している。また長祿の変で討たれた一宮（尊秀王、自天王）は吉野奥の北山（現在の奈良県吉野郡上北山村）に御所を置いていた。これらの情報を混同したのか、意図的に歪曲したのかは判然としないが、ともあれ紀伊国では、忠義王が一時期、熊野に居住していたという認識が存在したことがうかがわれる。熊野に忠義王文書が複数残ることの説明としては合理的だが、禁闕の変・長祿の変との関連を整合的に理解するのは難しい。

このように近世社会では、時代が下るにつれて後南朝への関心が高まり、国学者らは忠義王の系譜・業績に関する考証を進めていった。けれども彼らは忠義王の実在を前提に研究を行ったため、忠義王伝説の矛盾点・不審点を突き詰めて考察することはなかった。結果として彼らは忠義王伝説にお墨付きを与えたと言える。彼らの著作は近代以降の後南朝研究の基盤となり、忠義王伝説は歴史学界でも一定の影響力を長く保ったのである。

おわりに

以上、推測に推測を重ねてしまったが、本稿の主張をまとめておく。

熊野那智の「色川文書」所収の忠義王文書が後世に作成されたものと仮定すると、その作成者は忠義王を長祿の変の被害者として人物造形する意図を有していなかったと考えられる。後南朝の嫡流とされる自天王の文書ではなく、弟宮とされる忠義王の文書が作成された不自然さは、文書作成時には忠義王が弟宮と位置づけられていなかったと想定することで解消される。

また奥吉野には南朝関連史跡は存在したが、江戸前期には後南朝関連史跡は未成立で、忠義王の名を知る人もいなかった。吉野に忠義王文書

が残っていないのは、このためである。自天王の名は知られていたが、後醍醐天皇の皇子と認識されており、禁闕の変・長祿の変とは関連づけられていなかった。

ところが『大日本史』編纂のための史料採訪が、熊野に残る忠義王文書と、かつて吉野で起こった長祿の変を結びつけた。吉野郡川上郷高原村の福源寺では自天王・忠義王の位牌が作られ、長祿の変で命を落とした二皇子として自天王・忠義王の名前が川上郷で浸透していく。南朝関連史跡は後南朝関連史跡へと改変され、自天王をしのお御朝拝式が創始された。川上郷が自天王・忠義王に関わる由緒書や旧記を多数作成して先祖の後南朝への忠節を喧伝した結果、後南朝伝説は外部に拡散されていった。これらの伝説は国学者が編んだ後南朝史に採り入れられることで信頼性と権威を獲得し、近代以降の後南朝研究の前提となった。

村田正志が、古文書学の観点からは疑わしい「色川文書」所収の忠義王文書を真正な文書と評価したのは、近世以来の後南朝研究の膨大な蓄積に影響されたからであろう。忠義王の「令旨」ではなく尊秀王（自天王）の綸旨を忠義王が奉じた文書であるという判断も、純粹に古文書学的なものではなく、『残桜記』の解釈に引きずられたものである。

実証主義を標榜する近代歴史学は、さらに言えば現在の歴史学研究も、決して近世の歴史研究と断絶しておらず、知らず知らずのうちに多大な影響を受けている。そのことに無自覚であれば、誤った歴史像を描き出しかねない。自戒の念を込めつつ強調しておきたい。

注

- (1) 本報告書資料編「熊野水軍関係文書」色川三号（二九八頁）。
- (2) 『残桜記』（国書刊行会編『伴信友全集』第三）一四五頁。
- (3) 村田正志「忠義王文書を訪ねて」（同『増補 南北朝史論』思文閣出版、一九八三年、初出一九八〇年）三一五頁。

- (4) 和歌山県立博物館特別展図録『熊野・那智山の歴史と文化』（二〇〇六年）二七一頁。注（1）も参照のこと。
- (5) 村田前掲注3論文、三一五頁。
- (6) 『紀伊色川村誌』（色川村、一九三六年）二二八・二二九頁。
- (7) 村田前掲注3論文、三一四頁。
- (8) 忠義王立願状写（「米良文書」、史料纂集『熊野那智大社文書』第三、統群書類従完成会、一一一〇号）。文書写真は和歌山県立博物館特別展図録『戦乱のなかの熊野—紀南の武士と城館—』（二〇二〇年）一四頁を参照のこと。
- (9) 村田前掲注3論文、三一六頁。
- (10) 森茂暁『闇の歴史、後南朝』（角川書店、二〇一三年、初出一九九七年）二〇八頁。
- (11) 『大乘院日記目録』嘉吉三年九月二十四日条（増補統史料大成『大乘院寺社雑事記』十二、臨川書店、三三五頁）。なお同史料は九月二十四日の夜に発生したと記すが、他の史料から二十三日の夜に起きたと分かる。
- (12) 『康富記』嘉吉三年九月二十六日条（増補史料大成『康富記』一、臨川書店、三八九頁）。
- (13) 前掲注12。『師郷記』嘉吉三年九月二十六日条（史料纂集『師郷記』第三、統群書類従完成会、一六七・一六八頁）も参照のこと。
- (14) 『康富記』文安元年八月六日条（増補史料大成『康富記』二、臨川書店、八六頁）。
- (15) 『師郷記』文安五年正月十日条（史料纂集『師郷記』第四、統群書類従完成会、二〇七頁）。『康富記』文安五年正月十九日条（増補史料大成『康富記』二、臨川書店、一三七頁）も参照のこと。
- (16) 『大乘院寺社雑事記』長祿元年十二月十三日条（増補統史料大成『大乘院寺社雑事記』一、臨川書店、二八七頁）。
- (17) 『経覚私要鈔』長祿元年十二月十一日条（史料纂集『経覚私要鈔』第三、統群書類従完成会、二九五頁）。
- (18) 帝国学士院編『皇室制度史』第五卷（ヘラルド社、一九四二年、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧）一一五〜一九頁。
- (19) 年末詳六月十五日竹原新兵衛館宛て忠義王軍勢催促状（『南狩遺文』卷五、山中信古編『南狩遺文』天香堂、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧）。なお同文書は『紀伊統風土記』にも収録されており、「三越村宗之丞蔵」とある（和歌山県神職取締所編『紀伊統風土記』第三輯、帝国地方行政学会出版部、附録三二三頁）。『紀伊統風土記』は「佐本莊」の項に右文書と内容の佐々木七郎衛門館宛て・武田弥五郎館宛ての忠義王軍勢催促状を収録しているが（『紀伊統風土記』第三輯、附録二七一・二七二頁）、「後人の偽作なるべし」との注記をつけている。
- (20) 訂正三版『群書類従』第二十一輯（統群書類従完成会）三六〇頁。
- (21) 黒川真道編『日本歴史文庫』1（集文館、一九一一年）一頁。
- (22) 『改定史籍集覧』第三冊（臨川書店）、「通記第十一」六三〜六五頁。
- (23) 訂正三版『群書類従』第二十輯（統群書類従完成会）三三五頁。
- (24) 『改定史籍集覧』第三冊（臨川書店）、「通記第十一」五八・六三頁。
- (25) 前掲注6書が「忠義は忠義王のことで未だ帝位に即いて居らざるも、南朝正統の天子として南朝党から仰かれていますので、論旨と称して居るが普通の論旨とは体裁が違つて実は令旨なり」と、本稿と同様の解釈を示している（二二頁）。
- (26) 佐藤虎雄「後南朝史蹟瀧川寺と金剛寺」（後南朝史編纂会編『後南朝史論集』新樹社、一九五六年）一五三頁。
- (27) 『続々群書類従』第八（統群書類従完成会）四八〇・四八一頁。
- (28) 佐藤前掲注26論文、二四六頁。
- (29) 天和二年（一六八二）に作成されたという金剛寺の過去帳には、長祿元年十二月二日に「南帝王一宮自天勝公正聖佛」が亡くなったと記されていることである（佐藤前掲注26論文、二五四頁）。新型コロナウイルス感染拡大などの理由で、原本はまだ確認できていない。
- (30) 『川上村史 史料編』下巻（川上村教育委員会、一九八七年）一九三頁。寛政三年（一七九二）に秋里籬島が著した『大和名所図会』や文化十四年（一八一七）に刊行された紀行文『芳野遊稿』も、先行の地誌類に影響されたのか、後醍醐天皇第七皇子が後南朝の天皇に擁立されるも長祿の変で殺されたと記す（『川上村史 史料編』下巻、二二八、二六四頁）。

- (31) 前掲注30書、二〇一頁。
- (32) 前掲注30書、二〇九～二一一頁。
- (33) 前掲注30書、二二九頁。本文中でしばしば『大和志』を引いているので、『大和志』刊行以降に成立したことは分かる。
- (34) 前掲注30書、二八三頁。
- (35) 『紀伊色川村誌』・『那智勝浦町史 史料編一』(那智勝浦町史編纂委員会、一九七六年)は貞享二年とするが、但野正弘『新版 佐々介三郎宗淳』(錦正社、一九八八年)が指摘するように延宝八年が正しい(一一三頁)。
- (36) 東京大学史料編纂所架蔵謄写本『南行雜録』(浅草文庫本)、東京大学総合図書館所蔵『南行雜録』(南葵文庫本)を参照した。
- (37) 延宝六年二月二十一日大経師権佑書状・同年三月十四日色川盛重覚書(『那智勝浦町史 史料編一』二二七・二二八頁)。なお昭和五十四年に村田正志が記し、現地に残した「色川文書再補修記」によれば、原文書は所在不明である。
- (38) 京都大学文学研究科所蔵『大日本史編纂記録』二三三号。『那智勝浦町史 史料編一』に翻刻が掲載されているが(二一六頁)、東京大学史料編纂所架蔵の写真帳(請求記号6140.13)によって一部訂正した。なお蝶の文様の旗は今も色川地区に伝わっている(大野保郷会蔵、和歌山県立博物館特別展図録『戦乱のなかの熊野―紀南の武士と城館―』一五頁に写真が掲載されている)。
- (39) 久保田収『近世史学史論考』(皇学館大学出版部、一九六八年)二〇四頁。
- (40) 東京大学史料編纂所架蔵謄写本『南行雜録』(浅草文庫本)には、【史料2】忠義王願文の頭注として「案ニ和州吉野郡高原村高峰山福源寺ニ長禄年中被殺給ヘル南帝両王子ノ位牌アリ。一ノ宮自天親王、二ノ宮忠義大禪定門トアリ。此文書ニアル忠義二宮ノ事ナルベシ。乙亥ハ康正元年カ。北朝ノ年号ヲキラヒテ甲子バカリヲシルセルカ。康正元年乙亥ヨリ長禄元年丁丑マテハ三年也。長禄元年二王遭害事ハ上月記ニ載タリ。此二王子未詳誰人之子也」と記されている。しかし、東京大学総合図書館所蔵『南行雜録』(南葵文庫本)には右の記述が見られないため、後の書き入れと判断した。
- (41) 『大日本史』第八冊(吉川弘文館)。国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/infondl/pid/770030_63 を参照した。
- (42) 大西源一「北山宮及河野宮の御事蹟」(『三重県史談会会誌』三一五、一九一二年)は「高原の福源寺には二の宮の御位牌を伝ると雖も、嘗て其の御墓を存ぜず」と記し、墓がなく位牌だけあることを不審に思っている(復刻版第三巻、郷土出版社、一九九九年、三四七頁)。
- (43) 前掲注30書、七二頁。
- (44) 『川上村史 通史編』(川上村教育委員会、一九八九年)四四頁。
- (45) 福島宗緒「吉野に於ける後南朝史蹟と伝説」(前掲注26書)二八二・二八三頁。
- (46) 前掲注30書、二〇一頁。
- (47) 『国史大事典』「大日本史」の項を参照。
- (48) 前掲注30書、二二頁。
- (49) 米家泰作「近世大和国吉野川上流域における「由緒」と自立的中世山村像の展開」(『地理学評論』七一A一七、一九九八年)四八四～四八六頁。
- (50) 前掲注30書、六七・六八頁、七四・七五頁。
- (51) 鹿児島大学附属図書館(玉里文庫)所蔵『南朝編年紀略』(国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」でマイクロデジタルを閲覧)。
- (52) 鹿児島大学附属図書館(玉里文庫)所蔵『南朝皇胤紹運録』(国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」でマイクロデジタルを閲覧)。
- (53) なお戦前に、大西源一が「南朝皇子を以て色川氏の女の所産となすが如き妄誕取るに足らず」と一蹴している。東牟婁郡役所編『紀伊東牟婁郡誌』上巻(名著出版、一九七〇年、一九一七年刊行の本を再刊)三一〇・三二〇頁を参照のこと。
- (54) 『改定史籍集覧』第四冊(臨川書店)、「通記第二十一 南山巡狩録附録」一五・一六頁。
- (55) 『改定史籍集覧』第四冊(臨川書店)、「通記第二十一 南山巡狩録系図」二七頁。

(56) 古典遺産の会編『室町軍記総覧』（明治書院、一九八五年）一四一頁。

(57) 注2書、一四三頁。なお◇内は割注である。以下同じ。

(58) 注2書、一四六頁。

(59) 和歌山県神職取締所編『紀伊続風土記』第三輯、附録二八七頁。なお現在は後醍醐天皇綸旨二通と忠義王文書は一つの巻に成巻されているが、『南行雜録』の三通の配列を見る限り、佐々宗淳が閲覧した時点で三通一巻だったとは考えにくい。むしろ現状の成巻は『紀伊続風土記』の配列に影響を受けていると思われる。

(60) 注59書、八二頁。